

特240

523

梅村甚太郎述

佛法僧漫錄

始



特240
523



『紋附鳥』又ハ『宮鴉』ノ名アル夜
間鳴ク事ノ出来ヌ鳥



鳴聲ガ佛法僧ト間違ヘラル、
『いのはうく』

佛法僧漫錄

梅村甚太郎

私は世間の學校や博物館等に備へてある佛法僧鳥の標本には信用を置き兼ねるので、曾て昭和四年七月の史蹟名勝天然記念物保存協會の誌上に於て吾縣鳳來寺山の佛法僧の鳴く事を報告すると同時に、其の末文に於て次の如き記載をして世の識者の教を希望した事がある。



斯學の權威者に希望す
洲原村の佛法僧は未だ手にて捕獲して見ぬけれども、既に鳥の形態は世間の標本にも見え、又現下の書籍にも佛法僧鳥として見とめて居る。鳥と同一である。又東洋日吉村等に於て捕へたのも皆同様である。然し、或は *Partridge orientalis* であらう、又或は *Oriental roller* と如くに書聞鳴かすして夜間のみ劉曉たる好音を發して佛法僧を二三百回も連続して囀鳴するものと餘りに習性に距りがある様に思はる。これ或は環境の如何によるものか、物理學的に反應の如何によるものか、抑々も亦何によりて然るか、茲に鳳來寺山の佛法僧の事を叙するに當り謹みて世の識者の教を乞ふものである。

記文は右の如くであるが、それ以來東京邊の銳來動物學者殊に鳥類學者から何とか示教があるものと望み居りしも、

以來七ヶ年間今に誰からも御示教を受くる事が出来なかつたのを甚残念に思ふて居る。勿論吾々の如き淺學者の言ふ事は探るに足らぬと見繼られたものであらうけれども、私はそれ以來どうすれば自己の疑問が氷解出来ることかと己れの低能を腐甲斐なく思ふと同時に、十ヶ年間研究を積んだ揚句には一つ反對意見を發表せようと期して居つた。

爾來どう考へても木曾の紋附鳥即ち日向の宮鴉は夜間佛法僧の囀鳴をせぬと認めたので、最後には本年六月吾愛知縣博物教員協會第四總會の節を利用して、尙最後の決定を得んとして「今後從來多くの學者が佛法僧鳥と思ふて居る此鳥が果して夜間其囀鳴を爲すか否」に就て觀察の結果を報せられん事を約した。

然るに其翌日に至りて、東京朝日新聞に先般鳳來寺山よりの放送によりて、東京の鳥類學者は從來の説を引つくり廻して、彼の紋附鳥即ち宮鴉は晝間ガア／＼と鳴く計りで、夜間は靜まり返つて居て逆も鳴くものでないと言ふ様に成つたと



出て居つた。そこで私も思ひがけなく急に天下晴れて過去の考を主張する様になつたのを喜ぶ。古人曰く「百聞一見に如かず」と。併し茲では「百見一聴に如かず」とでも言ふか。

◇
そこで一方これまで世の學者が何と云つて居るかと思ふ書を窺ふに、

昭和三年九月史蹟名勝天然紀念物第三集第九號に小島博士を以て評判の高い今の農學博士内田清之助君は佛法僧と題して縷々數千言を述べられて居るが、其文の冒頭に

佛法僧一名三寶鳥とも呼ばれ、我邦では誠に稀有な鳥であるが、古來詩歌などに咏まれ有名な鳥である。此鳥は棲處が高野山、日光等の深山靈域名林に限り、且つ其鳴聲が佛法僧の三寶を唱ふとの事が棲處の靈場と結び附けられて此鳥を有名ならしめたのであらう。殊に高野山が佛法僧の名所として名高くなつたのは弘法大師の性靈乘に後夜開佛法僧鳥として

閑林獨坐草堂曉、三寶之聲聞一鳥、一鳥有聲人有心、性心雲水俱丁々。

とあるによつての事である。現今でも高野へ登山する人は此鳥の聲を聞かん爲めに暮夜奥の院に杖を曳くものが少くない。但し實際は中々其聲を聞く事は困難であると。

の文字を並べられ其次に佛法僧の分布の頂に於て其鳥の學名を *Eurytomus orientalis Canalyx Sharp* とせられて居る。成る程弘法大師の佛法僧は文字通り三寶の音を囀鳴するも此學

名の鳥は木曾の紋附鳥。日向の宮鴉の事であつて晝はクワツク／＼又はグエ／＼等と八釜數くも晩方五時にも成れば喬木に穿てる穴の中へ這入つて仕舞つて終夜一言も鳴かぬのである。鳴かぬものを鳴く積りで居られるからそこで前陳の如くに「但し實際は中々其聲を聞く事は困難である」と思はれたものであらう。

◇
内田君は又科學知識第四卷の六月號に佛法僧と題して、此紋附鳥の形狀習性を記述せられて居るが、其時にも弘法大師の詩を録して「此鳥の聲を聞かんが爲め暮夜其の院に杖を曳く者が少くない、但し本物の鳴聲は滅多に聞かれないが。」と云ひ、次に其鳴聲の條に於て「我國でこそ有名な佛法僧の鳴聲も外國では無論特殊なものとも考へられないので、是に就いて特に詳しく記載されたものがないが聞き手によつては或は *Kink*, *Kink* と云ひ、或は *Quack*, *Quack* と云ひ、又は *Ka*, *ka* と聞かれ、又カケスの鳴聲に似てる」とも記載され、「予は此鳥の鳴聲を聞いた事がないから何とも云はれないが、幸に高野山中學校教諭榎本佳樹氏が數年に亘つて記録せられたものを氏の好意に依つて寄せられたから次に掲載する」として、其次に榎本氏の精密なる三寶鳥の鳴聲の説明が示されて居る。けれども榎本氏の調査された發音は正しく弘法大師の所謂佛法僧とも云ふべき鳥であつて、決して紋附鳥の鳴聲

でなからうと私は何時も思ひつゞけて居たが、榎本氏が又一度今年六月五日六日の兩日に洲原神社のものを聞きに來られ、二日とも夜は静まり返つて只晝間クワツク／＼又はグエグエと鳴くのみであるので大に失望して大阪へ歸へられた由が判然したので、元來同君が高野山で調査せられた時は其鳥の鳴く姿を見て調査したものか、或は漫然夜間森の中より來る三寶の聲を調査したものかに就いて私は之を榎本君へ御尋ねをした。處が再度返事が來たが、二度目の御手紙によれば、結局其姿を見て囀鳴を聞いたのでないから、差當り紋附鳥の方は三寶の聲を發して鳴かぬ方に賛成せられたとの事である。尤氏は最初より非常な確信を持つて研究を爲らるゝ篤學者で、尙一面從來佛法僧と思つて居た鳥に就いても今後共研究を續ける精神であるとの事であつた。

◇
次に私の畏敬する鳥類學者黒田侯の方はと先生の名著鳥類圖譜を見るに、其第二卷の四十六頁なる佛法僧の記文中に鳴聲佛法僧と聞ゆるとして著名なりとして其學名に *Eurytomus orientalis canalyx* を宛てられて居るのみならず、昭和四年五月のことであつたが岐阜縣史蹟名勝天然紀念物調査委員竹本常藏氏が同縣武儀郡洲原神社に佛法僧らしき鳥の來棲するに當り、氏は私に其眞偽を視察して呉れとの事であつたので私は快諾して共に往きて之を視察した處、晝間はクワツク／＼と

鳴くのみで、夜間は寂として音沙汰が無かつた。其後私は二度まで調査せしも更に三寶の發聲に接せざりしを以て、これは弘法大師以來の眞の佛法僧には非るべしと答へしに、氏は失望して之を東京の黒田侯に御尋ねをした處、間もなく黒田侯から「これは間違ひなき佛法僧に有之候。併し晝間はクワツク／＼又はグエ／＼等と鳴き、夜間は佛法僧と鳴く者に有之候」と、返事があつたが、餘りに簡單の説明であつたので竹本氏は己むを得ず其のまゝ其由を縣當局へ報告したとの事であつた。要するに黒田侯も矢張例の紋附鳥即ち宮鴉を佛法僧と鳴くものと思つて居られた事は前段申し述べた内田君と同様であつて、御兩人共會て三寶鳥の囀鳴を實地に御聞きに成つた事が無かつた様である。

◇
次に更に畏敬する鷹司公爵殿は何様かと御著書飼鳥を聞いて見るに「佛法僧鳥は一名念佛鳥と云ひ鳴聲阿彌陀佛と聞ゆ」とある。何でも清の王漁洋が池北偶談に曰く「王得臣が塵史に安陸に有念佛鳥、小於鸚鵡、色青黒、常言一切諸佛。」これによると一切諸佛又は阿彌陀佛とも鳴く譯であるが、私は何様にきゝ直して見ても日本の三寶鳥（鳳來寺で鳴く佛法僧鳥の事）の聲は左様に聞く事は出來ず、又紋附鳥即ち宮鴉でも尙更其様の聲を爲さぬ事を知る。

前陳洲原の佛法僧に就いては武儀郡八幡高等女學校長の太田成和氏が之を三寶の聲を發する佛法僧と同一の者と考へて著書までして居らるるけれども、私や榎本君が數回の視察の結果から見ても決して三寶鳥ではなく、明治以來の動物學者が深い考も無く佛法僧鳥だときめて仕舞つた所謂紋附鳥なのである。私は曾て氏に其鳴聲に就て其意見を質した事があつたが氏の考では此鳥は悅樂の境に入らざれば容易に佛法僧とは鳴かずとの返事であつた。然るに既に同處の如く好んで自ら來棲して營巢し雛を養ひ、晝間は朝から元氣よく飛び廻り次いでゲビ／＼と鳴きつゝ雌雄仲よく樹枝にとまりて交尾をもなし、雄は虫を捕へ來つて之を雌に口移しに與へるなどさも樂しげにして居るに拘らず、日暮よりは巢穴の中に這入りこんで仕舞つて、終夜閑靜にて一聲も囀鳴せぬのはこれでも悅樂の境に入らぬのであらうか、甚だ不可解の極である。尤氏等が稀に晝に成つてから二タ聲三聲鳴いた事があると言はるゝも、私の觀察によればそれは郭公くわくこうの鳴くのであつた。私が本年六月十一日に往つて鳴聲を確めた時にも紋附鳥は更に夜間鳴かなかつたが臬や鳩の類が夜明に鳴いたのを聞いた。

次は本年三月發行せる岐阜縣史蹟名勝天然紀念物第四回報告書を見るに、吾畏友波磨實太郎君の調査論文に洲原の佛法僧の事があるが、其参考論文として太田氏と内田氏の著書を

主とせられた爲めに矢張此紋附鳥と弘法大師の佛法僧とも混同したる結果最早終に甚だ解し難き文章と成つて居るのを吾畏友の爲めに甚遺憾とするものである。

然し乍ら最早紋附鳥が佛法僧の聲を發せざるものとすれば、何か他に聲の主を求めねばならぬが、本年六月十七日の東京朝日新聞に左の記事があつた。

鳳來寺山より放送の後、淺草仲見世附近の傘屋さんで愛鳥家の西島勇さんの飼育して居るこのはづくが、其様の鳴聲をすると云ふので黒田侯が三日三晩借りて來て聽覺を傾けて始めてそれが聲の佛法僧であると云ふ事が判り、こゝに始めて古今東西の佛法僧に關する學說記録等々と照合してこの斷言を下した譯である云々。又一面に野鳥の研究家で知られた山梨縣社寺課の中村幸雄氏が、早くからこの説を稱へてつい最近も啼く聲を摹つて鐵砲を打つたところ落ちて來たのはこのはづくであつた。

右の二説によると實にこのはづくが三寶の聲を發する様に思はるゝが、私は鳳來寺山で鳴く眞の三寶鳥の鳴聲とは違ふと思ふ。抑このはづくの鳴音はホー／＼であつて夏の夜此鳥の鳴く事は古來周知の事で決して今日始つた事でない。此鳥の鳴聲はたゞ低くホー／＼と云ふ丈けであるも、佛法僧鳥の鳴くのは佛、法、僧、と語尾を上げてしかも金をたゞく様な聲で鳴くのである。

茲に斯う云ふ話がある。即ち本年七月四日私の附近の服部卯兵衛と云ふ人が、晩方八時頃に私の宅へ急いで來て、只今佛法僧に似た鳴聲をする鳥が八幡様の附近の谷口劔太郎君のアンテナにとまつて鳴いて居るから早く來て何かの参考にして呉れとの事であつたので、私は直ぐ連れ立つて聞きに往つた。そこには男女が二十人許も集つて居て耳を傾けて聞いて居たが、皆鳳來寺山のものに似て居るが、ホー／＼と鳴く丈けで僧と云ふ鳴聲もなく、且つ音律が違ふので鳳來寺山のものとは全く違ふと言ふ事に衆議一決した。私も數年前このはづくが御器所の八幡社前の松の老樹に營巢して居てそこから二三疋の雛が落ちて來た事を知つて居たから其話を今の卯兵衛氏にすると、氏は曾て近所の理髮師の村上藤次郎氏が大字東脇の御社宮司のむくの老木に此様の鳥が巢食つて居て、親鳥が鳴くのでそれを注意して探つたとの事であつたから、私は直に床屋へ行つたが、生憎主人は一寸留守なりしも、丁度よく谷口劔太郎氏の居合せるに會し、其の話を爲しゝに「此の頃は毎日の様に私の附近に來て鳴くが、あれはこのはづくです、佛法僧の聲とは大違です、夏に成れば毎日來て鳴きます」との事であつたが、そこへ村上氏が歸つて來た。氏は言ふ。「只今途中で鳴いて居ましたが、あれは三寶鳥ではありませぬ」と、そこで私は先年社宮司のむくの老樹に居て其鳴く聲を聞きし鳥は何様な鳥なりやと尋ねしに夜間ホーホ

ーと鳴く鳥で、當時は空氣銃で打つ事が出来なかつたけれども、三疋の兒を探つて暫く飼つて居たが、餌に窮して終に動物園へ寄附した」との事であつたから、私は曾て熱田の國學院の小使部屋へ飛び込んで死んだと言ふこのはづくの剝製を村上氏に見せた所、全く此鳥であつたとの事であつた。併し此様な鳥ならば昨今覺王山でも八事でも高藏の森でも何處でも盛にホー／＼と鳴いて居る鳥で、今更佛法僧と鳴く事の出來ない事は判つてゐる。私は紋附鳥では勿論鳴く事は出來ぬが、さればとて三寶の聲を此このはづくの鳴聲なりと斷言するは甚だ穩當ならずと斷言するを憚らない。私が今此の稿を書き居る處の傍に人あり私に告げて曰く「鳳來寺山のは金毛九尾のこのはづくに非らずや」と斯くて相顧みて苦笑した。

今より七十四年前に行脚研究の畫家たる玉蘭齋が萬象寫真圖譜と題せる凡そ四六判形の一小冊を公にして自ら鳳來寺山に登りて目撃せる鳥の圖を掲げ、そこに下文の如くに附記して居る。

下野國日光山、越中國立山、三河國鳳來寺山、紀伊國高野山、大和國吉野山、奥大峰山上等に此鳥棲む。其鳴聲竹筒を吹くが如く佛法僧法と聞ゆ。玉蘭先年三州鳳來寺の行者越に登り絶頂にて見る所を描す。高野山大峯にては其鳴聲を聞くのみ。

此書は文久甲子の歲群寶堂の出版であり且つ文中に先年と

云ふ所を以てすれば少くとも今より七十四五年以前の事たるや明であるが併し乍ら氏は此山にて聲も聞き鳥も見たりと云ふ丈の事で鳴きつゝあるのを目撃したとは書いて無いのである。これ恐くは故人藤霞堂などの流を汲んで唯その鳥のみ信じて居た結果であらう。

桃洞遺筆を書いた紀伊の小原氏も其書中に種々佛法僧の物語を記述しては居るが矢張其文中に予未だ其聲を聞かずと云つて居る。故に鳴聲を聞かずに書物を著す人は今も昔も随分世間に例のある事である。其書中に田宮氏の橘菴漫筆に梟の類とするは非なりとある。田宮氏は又嗚呼矣草を著し其第三卷に左の記事がある。

「予才ばかりの比、楚吟といえる狂歌詠人ともなひて、月の輪山へ時鳥聞きにまかりしに、時鳥得聞かて歸りに松の尾の里の花巖寺に訥我といへる和尚のおわせしを訪侍りしに和尚も日比のおこたりども語りあかして永日も暮に及びんとす。櫻和尚のいへるは、一昨日夕より此うしろの山に佛法僧の鳴侍るが是非聞て歸るべしとありし故、予も認浴などしてまつに、初夏の比啼出せり。乙聲にて大なる音なり。フツボウノと斗り啼けり。和尚の申さるゝは谷を隔て、雌鳥そうくと鳴侍ると村老はいへれど如何や知らず。我も此寺の住侶となりて拾三年になり侍るが二度ならで聞侍らず。かしこふぞけふはおせしと悦ばる。予も僥倖を得ぬ。據此佛法僧の啼ける山えたりて拾八日の月影にすかして見しに晝程もあるべき鳥なり。古歌にも

「松の尾の峯しづかなるあかつきに」と詠みたれば究めて梟の類に決すべし。安永元年辰の四月十八日の夜の事なりけらし。」

いづれ三寶の聲を出す鳥は夜間活動する鳥なるべきは勿論ならんも軽々しく速断をすることは科學では禁物である。科學の研究では月を杜鵑と思ひ蚯蚓を見て螻蛄と思ふのと同じの誤に陥つてはならぬ。

佛法僧の鳴聲は僧の字を略して佛法と鳴く時もあるが、其時でも僧の字を鳴く丈の間隙の存する事である。世間此鳥の聲を聞かんとして登山するも、往々失敗に終ることがあるは氣の毒であるが、此鳥は五、六月頃が最も聞くによいのである。元來此鳥は四月十六七日頃より毎年鳴き始め、九月の半頃まで鳴くのであるが、五六月頃は夕方未だ人顔の認め得らるゝ頃より鳴き始め時々間隙はあるにしても夜を通して朝まで割合に近い處で良く聞える。尤曇つた静な日や、俄に雨の降り止んだ日などは朝の八時頃でも屢々鳴聲を耳にすることもあるが、其様の時には長く連続しては鳴かず。大底四五回か精々長くても十回位である。次に七月初め頃からは日暮頃より鳴くも七月下旬に成れば大底八時九時頃より鳴き初め、八月に成れば大底十時以後でなければ鳴く事なく、九月以後には往々鳴かぬ日もあるのが普通の事である。

雨天の時は何様かと云ふに大雨の時は別として小雨の時に

は鳴く事もあるが鳴かぬ時もある。思ひ起す、昭和三年八月、名古屋市教育會が夏期講習を實地に鳳來寺山に行つた時、同山に一日と二日と二泊した事があるが其初夜は晴天にて、勿論非常によく鳴き、次夜は雨天なりしも、これまた從來の記録を破つて可なりよく囀鳴した。然るにその二三年以前に名古屋市一流の財閥家の紳士連が、萬端を準備して來山した時には、生憎晩方から雨天となつて終夜一聲も鳴かなかつた事がある。それで世間では前者は鳥が特に教育者に同情を表して歓迎したのだと云つた位であつた。月夜は如何と云ふ人があるが何等差支なく囀鳴するものである。而して我が鳳來寺山で聞いた中では、一時に二百回も鳴き続けた事があるが昨年は六百回もつゞけたと鳳來寺の村長であつた丸山喜兵衛氏より過日通知があつた。

尙一つ書き忘れた事がある。過日三河鳳來寺から放送した佛法僧鳥の聲が餘りに鮮明に聞えたのであれは本當の聲ではなく何か寺の和尚が人工の笛でも拵へて人を胡麻かすのであらうと云つて居つた學者や博士があつたとの事を私は確な人から傳へ聞いたが、あの鳴聲が人造であるか將た自然であるかを疑ふ人は先づ實地に就いて御聞きに成つたら判る事と思ふ。

例の紋附鳥も鳳來寺山では東照宮の林の上空を夏月朝五時六時頃に注意して居れば、其八釜數鳴いて飛び廻るのがよく見える。又それと同様の鳥の剝製が鳳來寺にあるが、それは朝鮮産の鳥であつて夜は鳴くものにあらず。

抑佛法僧鳥は東洋の特産の靈鳥なれば此鳥を研究するには西洋人の著書を山の如く積み居る丈にては効なく、又鳴かぬに定つた紋附鳥の剝製を澤山諸方から集めて徒に其標本の數を數へて居る丈では科學は一步も進むものに非らず。

勿論夜間囀鳴の鳥なれば、梟鳴類か或はそれに近きものたる事は想像し得らるゝが如き感なきに非らず。これ實に一方の問題にあらずして邦家の問題なり。世の新進氣鋭の動物學者何ぞ奮つて眼前に横はる此一大問題の研究解釋に勉めざるや。

368
92

昭和十年八月廿三日印刷
昭和十年八月廿八日發行

【非賣品】

名古屋市中區御器所町東脇五七番地
著者兼 梅村甚太郎

名古屋市東區千種町五反田五二番地
印刷所 益社

名古屋市中區御器所町東脇五七番地
發行所 梅村甚太郎

終

